

# けやき通信

Faculty of Education, Gunma University News. "Keyaki"

第2号 (2012年2月)

## 公開シンポジウム「教師のデザイン」、盛大に開催

さる12月17日、本学ミューズホールにおいて、「国立大学法人群馬大学と群馬県教育委員会との連携に係る協議会（教育改革・群馬プロジェクト）」の主催により、公開シンポジウム「教師のデザイン 群馬県から発信する教員研修」が、県内外の教育関係者約200名の参加のもと、盛大に開催されました。本シンポジウムの趣旨は、国内外の教員養成・研修、とくに大学院でのその動向をふまえ、新しい教員養成・研修のモデルを本学、本県から発信していく手ははじめにするというものです。

1大学の企画としては異例のことですが、徳永保・国立教育政策研究所長より「実践的指導力を育成する研究と教育」と題して、また、日向信和・文部科学省教育改革調整官より「『教員の資質能力向上特別部会』での審議状況」と題して、それぞれご講演をいただきました。

また、シンポジスト・指定討論者として、本学教職大学院より山崎、入澤、懸川、清水の各教授、修士課程より豊泉課程長、佐野准教授、江森附属小学校長、県教育界より高橋総合教育センター長、須永学校人事課長、堀澤義務教育課長、国立赤城青少年の家・桜井所長、宝泉中学校・萩原校長と（筆者自身は別として）錚々たる顔ぶれが揃いました。

まず、徳永所長の講演では、種々の教育問題の原因を短絡的に「教員の資質能力」に帰属させる議論に釘を刺したうえで、子ども理解、特別支援などについての学際的な研究と、それを基盤にした教員養成を行う必要性と、そこでの大学院教育学研究科の役割の大きさについて、ご指摘、というよりは叱咤激励を受けました。

続く日向調査官の講演では、教員養成については養成課程で育成すべき資質能力とそれを実現するための大学院側の体制について、現職研修については種々の研修機会での成果の可視化・体系化についてなど、大学と教育委員会の課題がわかりやすく提示されました。

大学院専門職学位課程教職リーダー専攻教授 山崎 雄介

続くシンポジウムおよび指定討論では、本学の教職大学院、修士課程、附属学校各々での教員養成・研修のとりくみとそれを基礎とした提案（管理職養成プログラム、理科教育長期研修院）や教育現場への成果の還元（教職大学院修了生の勤務校から）、県教育界からは教員養成・研修の現状と、今後に向けての期待や課題、教育業界の「外」からの視点など多様な発言がありました。

終了後のアンケートでは、フロアからの発言機会がなかった点、大学教員の現場への理解の不足などへのお叱りの声もありつつ、「現職教員の資質向上についての課題は十分に指摘されていたか」との問いには8割近くが肯定的な回答、教職大学院、修士課程、理科教育長期研修院についてもそれぞれ7～8割の回答者が期待を寄せるなど、本学のとりくみ及び県教委との協働について、一定の発信はできたのではないかと思います。

最後に、登壇者の皆様はもとより、この企画にご協力・ご参加いただいた学部内の先生方、多忙の中ご挨拶いただくとともに最後まで長丁場をお付き合いいただいた高田学長、平塚理事、そして何より、冒頭にご挨拶いただいた福島教育長はじめ、県内教育関係者の皆様に改めて感謝いたします。



指定討論を行うシンポジスト



徳永保・国立教育政策研究所長



日向信和・文部科学省教育改革調整官

# 教員免許取得プログラムの開設

大学院修士課程長 豊泉 周治

修士課程では、平成24年度から教員免許所得プログラムという新しい制度をスタートさせる。教職に強い意欲をもって修士課程に入学し、新たに教員免許状の取得を希望する学生に対して、一定の範囲内で修士課程の学修と併行して教育学部の授業の履修を認め、免許状を取得できるようにする制度である（図表を参照）。

これまで大学院で新たに免許状を取得する道は開かれていなかった。1種免許状を有する学部卒の学生が修士課程で研鑽して専修免許状を取得するというのが、これまでの基本ルートである。しかし、教職を目指して修士課程で学びたい学生の経歴は他にもいろいろである。本プログラムによって、従来のルートに加えて、修士課程での学修を教職へと結ぶ実に多様なルートが用意されたことになる。特に、教育学部以外では取得しにくい小学校や特別支援学校の免許状の取得を希望する他大学出身

の学生にとって、本プログラムは大きな魅力となることであろう。本プログラムによって、修士課程における教員養成は従来からの学部卒の学生に加えて、他大学、多方面から新しい学生を迎え、大きくパワーアップすることが期待される。それは群馬県で教職をめざす大学院生の裾野が大きく広がることを意味する。

免許状の取得と修士レベルの教員養成を両立させるわけであるから、もとよりそれは容易なことではない。新たな免許状取得に向けて教職の専門性を基礎から積み上げながら、同時に修士レベルの高い専門性と実践性を修得し、授業力と研究力を磨かなければならない。学生にとっても指導する教員にとってたいへんな挑戦であるが、力のある多彩な新人教員を教育現場に送り出すことがなにより大切だと考えている。平成24年4月から、修士課程における教員養成の新たな挑戦が始まる。

### 教科教育実践専攻

取得希望免許 既取得免許状	小学校		中学校		高等学校
	1種	2種	1種	2種	1種
未取得	—	◎	—	◎	—
幼稚園	◎	○	◎	○	—
小学校	○	△	◎	○	◎
中学校	◎	○	○	△	○
高等学校	◎	○	○	○	△

\* ○は2年間で、◎は標準修業年数を超えて取得できることをします。

### 障害児教育専攻

取得希望免許 既取得免許状	小学校		中学校		高等学校	特別支援学校	
	1種	2種	1種	2種	1種	1種	2種
未取得	—	—	—	—	—	—	—
幼稚園 小学校 中学校 高等学校	—	—	—	—	—	○	○

# 教員免許状更新講習の実施状況

更新講習企画室副室長 豊泉 周治

平成21年度から教員免許更新制がスタートし、各学校に勤務する現職教員は定められた期限までに大学等で実施される30時間以上の免許状更新講習を受講・修了することが義務づけられた。多数の現職教員を輩出している群馬大学でも、平成21年度から教育学部が中心となって更新講習を開設し、毎年、県内の受講対象者のおよそ半数が本学の講習を受講している。

平成23年度は夏期9日間、冬季5日間の講習を実施し、必修講習7クラス、選択講習78クラスを開講し、必修講習は合計830人、選択講習は延べ2365人が受講した。12時間の必修講習（2日間）では、教職大学院や教職科目担当の教員が講師となって、「最新の教育事情」に関する講習を実施し、「教職についての省察並びに子どもの変化、教育政策の動向及び学校の内外における連携協力」について、独自に編纂したテキストをもちいて講義を行っている。各6時間の選択講習（受講

者は3講習合計18時間を選択して受講）では、修士課程のほぼ全教員が講師となり、それぞれの専門を生かして各教科の内容や指導法に関する講習を実施している。

制度そのものへの賛否はあるが、現職教員にとっては大学での学びに再びふれる機会になっており、講習を担当する大学教員にとっては、それぞれの専門の教育研究が現職教員の視点から試される機会となっている。すべての講習は終了後、受講者全員から事後評価を受けている。幸いにして受講後の評価結果では、平均して受講者の40数%～60%が講習の内容について「よい」、40数%～30数%が「だいたいよい」と回答しており、合わせて90%以上の受講者から積極的な評価を受けている。



## 震災被災地支援 本学の取組について

学生支援委員長 西園 大実

東日本大震災被災地の教育支援を4年生12名が行った。事前準備として7月に女川、仙台、岩沼など被災地の状況を視察して肌で感じ、第1期として8月1日より女川第一中学校（宮城県女川町）に8名、第2期として9月26日より玉浦小学校、玉浦中学校（宮城県岩沼市）に計4名が支援に入った。

被災した学校では、児童生徒や教員の避難生活、建物が使える学校に2校以上が同居、新学期の開始遅れなど困難な状況が続いており、学習の遅れを取り戻すべく授業や補習が実施されている。学生は教育実習の経験を生かし指導を行い、一方で被災しても明るくふるまう子どもたちに元気をもたらしてきた。

群馬大学では、現地の教員を手助けし、また被災した子どもたちの力に少しでもなればという思いで、積極的に支援に取り組んでいる。学生は自ら希望して参加し、インターンシップとして単位認定される仕組みを整えた。このように被災地教育支援において単位認定を行っ

ているのは、全国でも本学だけの制度であり、この支援は来年度以降も長く継続していく予定である。

また、学生の現地の活動を全面支援してくださった宮城教育大学に深く感謝する。



女川第一中学校にて



学習支援風景

参加学生（いずれも4年生）

- 第1期 吉田 奏、井達 弘貴、鹿沼 久恵、須藤 千尋、  
松原 優香子、福嶋 克人、青柳 佳祐、登川 希香
- 第2期 小野 美鈴、田口 翔平、諸星 莉沙、松村 春佳

## 学部教員の職能発達のための教員養成FDセンター

教員養成FDセンター長 黒羽 正見

全国の教員養成学部には、「大学教員間に教職課程が専門職業人たる教員養成を目的とするという認識が共有されていない、教員の研究領域の専門性に偏した授業が多い、学校現場の課題に十分に対応していない」等の問題点の指摘が多い。そこで本学部では、大学教員養成をより学校現場の現状や課題を踏まえた内容とするために、県教委との連携、学部カリキュラムの改革、教職大学院の設置等の課題解決を図ってきた。そして、附属小学校の1学級減実施を機に、附属小学校内に子どもサポートセンター、教員養成FDセンター、学部・附属共同研究センターの3センターを設置し、平成23年4月に本教員養成FDセンターの開始となった。

本センターの主な目的は、教員養成学部での経験のない新任教員の職能発達を図り、自身で教員養成にどのように関わるべきか考える機会を提供することにある。昨今の緊迫した教員養成変革の渦の中で、本学部教員として活躍していただくためには、教員養成システムの現状とその課題、群馬大学の教員養成の特質等の速やかな理解が不可欠である。それゆえ、附属学校園を主なフィー

ルドに学校現場の現状理解、自分の専門分野を生かした学生指導のあり方、学校現場が抱える課題解決への寄与等を考える機会を提供することが重要である。

本年度は着任後おおむね3年以内の教員を主な対象として活動を行った。教育活動観察会では授業参観だけでなく、附属学校教員の教育実習生に対する学習指導案作成指導の参観や意見交換なども行われた。その意見交換の中で、「教師には児童生徒の発達段階に応じた指導技術が必要であることがよく理解できた」といった学校現場に足を運ばなければわからない気づきの深まりもみられた。新任教員も秋には教育実習で県内学校を訪問し、研究授業や研究協議会に出席し、管理職との情報交換を行わなければならない。FDセンター員を交えた教育サロンでは、新任教員が学校を訪問した際、いろいろな点に戸惑っている実態も明らかになった。

来年度は個々の新任教員の実態を踏まえ、附属学校教員と大学教員が一層の緊密な協働性を追求できる活動内容を企画していきたい。



## 高い合格率をキープ、群馬県教員採用試験結果

学生支援委員長 西園 大実

今年も多くの学生、卒業生が教員を志願し合格を果たした。24年度は、群馬県公立学校教員として新たに159名（正規採用）の群大教育学部出身者が加わるようになった。

表1に平成24年度採用群馬県公立学校教員採用試験の校種別の結果を示す。毎年、群馬大学教育学部出身者が大きな比率を占めており、今年も全採用数の34%と1/3以上を占めた。表2には平成22～24年度の教育学部新卒者（学部、大学院、専攻科）の群馬県教員採用試験の志願者数と結果を示す。志願者数が昨年と比べ

て25人減った分、合格者数は少なくなったが、高い合格率をキープした。

群馬県では、昨年から小中併願枠が新設され、教育学部では小中両免を取得するメリットを生かしてこの枠での受験者が増えた。また二次試験の面接での8分間模擬授業は今年度も課され、教育実習で鍛えられた本教育学部生の評価はきわめて高いものがある。カリキュラム改革による教育実習の充実、後援会諸先輩の協力を得ての教員採用試験対策講座の充実などが着実に成果をあげている。

表1：群馬県公立学校教員採用試験の校種別結果と占有率（既卒者含む）

平成24年度採用	全合格者数	群大教育学部	
		合格者数	占有率
小学校(小中併願を含む)	152	62	40.8%
中学校(小中併願を含む)	196	72	36.7%
小中学校 計	348	134	38.5%
高等学校	97	16	16.4%
特別支援学校	22	9	40.9%
全合格者 合計	467	159	34.0%

表2：新卒者（学部、大学院、専攻科を含む）の群馬県公立学校教員採用試験志願者と試験結果

採用年度	志願者数	一次試験合格者数 (志願者に対する合格率)	二次試験合格者数 (志願者に対する合格率)
平成24年度	160	117 (73.1%)	93 (58.1%)
平成23年度	185	136 (73.5%)	108 (58.4%)
平成22年度	188	115 (61.1%)	81 (43.1%)

## 学部長退任にあたって

教育学部長 小池 啓一

学部長の4年の任期が終了する。学部長就任が決まったとき、研究室のある建物は耐震補強の改修工事中で、理科教育講座の先生方と相部屋で仕事をしていた。

学部長の仕事として考えたことは3つある。第一に、群馬大学教育学部・大学院・附属学校園のミッションを明確にすること。次に教養教育を改革すること。そして教育学部と附属学校園の建物の改修を行うこと。群馬大学教育学部・大学院・附属学校園のミッションは、優れた新人教員を養成するだけでなく、教員生活を全うするまで教員の資質向上をサポートすることである。新人教員の養成については、実践的なカリキュラムを充実させるだけでなく、人間的な基盤形成のための教養教育の充

実が欠かせない。また、研究・教育の場としての環境整備はさらにその基盤をなしている。

果たしてどれだけの仕事ができかわからないが、これらの仕事については、若い先生方の力が大きく働いた。改修工事のワーキンググループには、必要に応じていつでも集まっていただき、時間を置かずにご回答をいただいた。カリキュラム委員会のメンバーには教員養成のためのカリキュラム改革だけでなく、教養教育改革の素案も作っていただいた。毎回一緒に仕事をさせていただいたことが一番楽しかった。やり残したことも多いかもしれないが、学内外の多くの方に協力していただき、充実した4年間であったと思う。



群馬大学教育学部ニュース「けやき通信」第2号（2012年2月）

発行：群馬大学教育学部

〒371-8510 群馬県前橋市荒牧4-2 / TEL：(027) 220-7204 / URL：http://www.edu.gunma-u.ac.jp/

・本紙に関するご意見感想等ございましたらお寄せください。